優秀賞

書評　樋口和憲著『笑いの日本文化「烏滸の者」はどこへ消えたのか？』

（東海教育研究所 2013 年）（和泉開架：382.1/112/ W ほか）

文学部２年　高田竜太郎

驚天動地、青天霹靂、無意識的に行われる「笑い」という行為には、かくも広く深い文化・問題が根付いていると意識させてくれるのが、本書である。

最初に本書を要約すると、著者は、まず日本の「笑い」の流れを以下の三つの段階に分ける。日本人が自然信仰により神に笑いをささげた時代。農耕により身分格差が発生し、権力者が自らの土地を治めるために神に笑いをささげた時代。近代化によって経済共同体ができ、笑いが芸能や職業へと変わった時代。その上で各時代の日本の「笑い」を取り巻く諸問題を提起していく。以上が本書の流れだ。とりわけ評者が着目したのは、急速な近代化・国際化に伴い、我々の価値が一元化しているという問題である。

「烏滸の者」という存在が、本書では度々登場する。「をこ」は古語で「愚かなこと」を意味する。しかし、そのままの意味にとってはいけない。日本人は昔から「烏滸の者」の見せる「狂」というものに価値を見出していた。笑いの対象であると共に、崇拝の対象としても見ていたのだ。例示するならば「天邪鬼」がある。元来「天邪鬼」は土地神であった。しかし、その土地の侵略者により鬼に姿を変えられ、以降、忍従と抵抗の象徴となった。「あなたは馬鹿だ」といわれたら「あなたは馬鹿だ」と繰り返すのが忍従、「いいや馬鹿じゃない」ととりあえず反論するのが抵抗といった具合だ。もし眼前にそんな者がいたら、いかが思うだろうか。圧力に対して道化を装い、笑いに変える。それが「狂」なのだ。また、それを演じるのが「烏滸の者」なのである。卑弥呼も「烏滸の者」だったといわれている。常人とは違い半ば酔狂した姿が、シャーマンとして崇められていた。「狂言」「狂歌」、畢竟日本人は作為・無作為にかかわらず「狂」が好きなのである。しかし現代は合理的、効率的であるのを良しとし、嘘や誤りを悪とする。もちろん病院や公的な取引の場に誤謬があっては困る。ただそれのみが絶対的な価値観になってはいないかと、著者は警鐘を鳴らしている。

日本の「笑い」文化も共同社会と利益社会の流れに沿っているのは本書の述べるところである。しかし、現状は果たして終点なのだろうか。哲学の思潮はソクラテス以前の自然主義から超自然主義へ、そして再びニーチェが「神は死せり」と述べ、「力への意志」を掲げ価値体系を一新した。本書の読後感には、これらを髣髴とさせるものがあった。「烏滸の者」とは社会的に異端な者ではあるが、日本人にはそれを許容していた精神・文化があった。ただ、現代はどうだろうか。今日の様々な問題、就中いじめ・育児・介護問題の背景には価値操作、価値の一元化があるのではないかと考える。私たちは自由の名の下に、統合化やメディア等に支配され、本当は何が善で何が悪かも操作されているディストピアの住人なのではないか。本書は現代の日本人の精神性に一片の「天邪鬼」を巣くわせる一冊である。